

高齢者の民謡伝承意識の形成と学校教育

佛教大学大学院 藤田 智之

1. はじめに

高齢化社会の進行は、高齢者を抱える家族だけでなく、社会全体の問題として捉えなければならない状況にある。高齢者の問題として、雇用や保健、医療、介護などといった問題は早急に解決しなければならない。とくに、福祉の分野においてはまだまだ課題が山積みとなって残されている。

社会福祉が高齢者に対して行わなければならない支援として、生活水準を考えるうえでは、生産的、経済的な側面から「量的」に捉えることと消費や文化、余暇活動など生活を「質的」に捉えるという方向性も同時に考えなければならない。とくに、生活の質を捉える場合、そのひとつのキーワードとして「自立」があげられる。高齢者の自立を考える時に、塚本哲人⁽¹⁾は、経済的自立と精神的・身体的自立という2つの視点が存在することを論じている。精神的・身体的自立は、外部からの支援だけでなく内部からの自己創出、自己開発も必要になってくるのである。例えば、生きがいを考えると、外部からの支援、サービス提供だけでは個人が生きがいとして捉えることは困難である。そのため、自ら生きがいを感知し、認識する能力が必要となってくるのである。したがって、生きがいを感知できる資質の育成や能力の自己開発という学習や教育が重要となってくるのである。子育てや仕事など一定の社会的役割を果たした後に、老後という長い生活が訪れる。高齢者の老後の無為を克服するために、どのように高齢者に生きがいをもたせ生活させていくのか。また「老人福祉法」の中でも高齢者に対する敬愛と尊重及び、「生きがいをもてる健全で安らかな生活」の保障が社会に求められている。

そして、心身の健康保持、知識の経験の活用によって希望と能力にふさわしい社会活動に参加することが高齢者に期待されている。高齢者が、生きがいをもつこと、社会参加あるいは役割取得による高齢者の精神生活の安定が求められているのである。

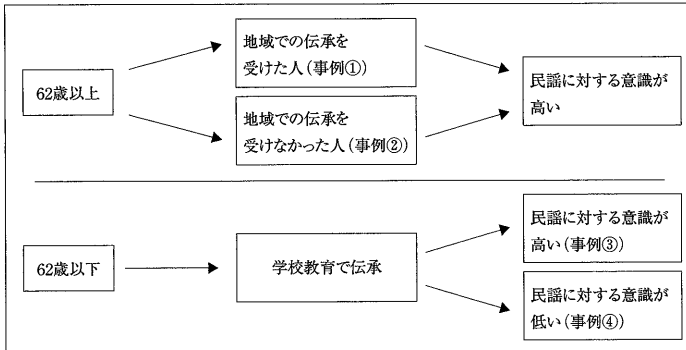
しかしながら、都市部に住む高齢者にいたっては、社会的な役割や生きがい、やりがいというものが希薄化する傾向にある。それは都市化のプロセスや情報化社会が浸透する中で、高齢者に対する役割や期待というものが重視されなくなってきたのである。高齢者の経験知や考え方は、古いものとして認識され、高齢者の社会参加や伝統の伝達などが、行われなくなってきたのである。そのため、都市部での高齢者の生きがいは、個人の趣味趣向が中心となっているのが現状なのである。社会的な役割という面においては、ほとんど自覚されない、できない状況にあるといっても過言ではない。

そこで本研究では、都市化の途上にある地域、「白川郷、五箇山の合掌造り集落」に焦点をあてた。この地域は先行研究⁽²⁾においては、民謡の伝承という社会規範によって、地域社会がつながっている共同体であることが検証されており、高齢者も地域の伝承活動を生きがいとして従事しているのである。とくに、民謡の伝承活動においては、保存会が中心となり子どもたちへの積極的な伝承活動が行われているのである。しかしながら、インタビューをすすめていく中で、民謡の伝承意識に対して世代間で格差が見られたのである。ある一定の年齢層とそれ以下の年齢層とでは、民謡の伝承に対する意識が異なっている傾向にあった。その背景として考えられることは、民謡に対する接し方の変化である。この地域では、民謡が常に好意的に見られてきたわけではなく、民謡をする人は、偏見や羨望のまなざしで見られていた背景がある。

民謡は皇族の前で披露する機会を得て、全国に広まり、民謡の価値が認められた。しかしながら地域住民は、その民謡の価値を認めていく状況にはなかったのである。それは、この地方の環境が大きく影響しているのである。ここでは半年は雪に閉ざされ、半年はその準備に追われ、内職し、生活をしなければならぬ。このような状況の中で、民謡を唄ったり踊ったりしていると「ドラ者」として見られたのである。しかし、伝統文化である民謡の理

解と認識を深めるために、昭和28年から笠踊りを学校教育の中でゲームとして取り入れたのである。そのことにより、民謡が身近な存在となり好意的に捉えられるようになった。これらの点を踏まえ「学校教育の一環として取り入れた時期に小中学校生以下の年代（現在まで）とそれ以上の年代では民謡伝承に対する意識が異なるのではないか」を仮説として、住民に対するインタビュー調査を行った。

民謡に関する意識形成のイメージ図



2. 研究方法

調 査 場 所：富山県東砺波郡平村相倉集落

調 査 期 間：2002年9月8日(日)～10日(火) の3日間

調査対象者：この地区に居住する成人及び高齢者

調 査 方 法：インタビュー調査

3. 調査地域の概要

相倉集落のある平村は、通称五箇山といわれ、富山県の南西部、白山山系の北端に位置する。現在は、平・上平・利賀の3村の地域を総称して「五箇山」と呼んでおり、古くは、下梨谷・上梨谷・小谷・赤尾谷・利賀谷の5つの谷を中心に集落形成された。気候は夏と冬の気温差が激しく、特に冬は零度を下し冷蔵庫の中にいる程の寒さである。また、夏の日の寒暖の差が大

きく、昼は暑く夜は寒い。積雪では昭和56年の豪雪の、1月に4.4Mの記録があるが、昭和9年に約5.3Mあったと記憶する村民もいる。合掌造りを維持するのに、個人の力のみではやっていけないため、「ユイ（結い）」という村人同士の相互扶助の組織がある。

「ユイ」慣行的作業として合掌造りの屋根葺きがある。年中行事として集落内では順序良く行われていた。屋根の葺き替えは、大きな屋根の場合六つの区画に分け、小さなものでも四つに分けて、その一区画を「ヒトワリ」とよび、ヒトワリずつ葺いていくのである。同様の意味を持つ精神として「コーリャク（合力）」という言葉もある。

このように、普段の生活から共同生活であるということを意識し、生活してきたのである。それは冬の季節には集落内に閉じ込められることとなり、自給自足の生活を強いられたことに起因するものである。平村は昭和40年まで陸の孤島であったが、国指定史跡に認定されてから、国道などが整備され、次第に交通の便が良くなり、次第に外界に開けてきたのである。平成7年12月、「五箇山・白川郷の合掌造り集落」が、世界遺産委員会で正式に世界遺産として登録されたことにより、大きな三角形の妻面を見せてそびえ立つ合掌家屋と集落の歴史的景観、そして周囲の自然環境などが良好に保存されていることが、日本を代表する歴史的遺産として高く評価されたもので、国内では6件目である。

また、この地域は、民謡の宝庫で多くの民謡が現在も受け継がれているのである。数ある民謡の中で、全国的に最も知られているのは、「麦屋節」⁽³⁾で、次に「こきりこ節」⁽⁴⁾である。近年は、「といちんさ節」⁽⁵⁾が知られるようになってきている。これらの唄や踊りは、富山県の代表的な民謡であると同時に、日本の代表的な民謡で、その芸能的な価値は大きいといえよう。

4. 事例をもとにした分析

この地域に住む高齢者の民謡に対する意識はどのようなものであるのか。また、世代間での意識の違いはあるのかをインタビューによって明らかにする。

【事例1：Aさん－76歳・女性、Bさん－67歳・女性】

著 者：民謡についてどう思いますか

Aさん：民謡は幼い頃から自然と親しんできた。昔からある「麦屋節」が身近に感じる。

著 者：民謡伝承については

Aさん：子どもの数が少なくなっているから心配ですね。伝承方法は、今は学校で小さい頃から教えているのでいいかと思う。運動会や学芸会などで踊りを発表しているから見に行っている^①。子どもたちは覚えが良く、上手に踊っていて動きも良い^②。また、高校生は毎年大会に出場して、好評を得ているので嬉しい。私も孫に教えたりしてますよ^③。

著 者：この地域についてどう思いますか

Aさん：多くの民謡が国の無形文化財に指定されている事、合掌造りが世界遺産に指定されていることはすばらしいことですし、この地域を誇りに思っています。昔は町に出るのが大変だったが観光客がたくさん来るようになると、道が整備され、町に出るのも楽になり暮らしが便利になってきたようだ。

著 者：民謡は受け伝えていくべきだと思いますか

Aさん：無形文化財にも指定されているのですから、次世代へ伝承していくべきです^④。

著 者：Aさんはどこで民謡を覚えたのですか

Aさん：家族に踊れる人がいたので教えてもらった^⑤。

著 者：民謡についてどう思いますか

Bさん：生まれたときから民謡は目や耳で慣れ親しんでいるので、民謡は体の一部です。一日中、聞いていてもあきない。昔は祭りで踊ったりしていた、今は踊ることもないがね……^⑥。あとは、少子化で後継者が少なくなっているから心配だね。

民謡はパート先にてテープで朝から晩まで流れているが、全く苦痛は感じないそうである。

テンポの速いトイチンサ（民謡）は聴いていてリズムを取るのが楽

しいから特に好きだ。

著者：民謡伝承については

Bさん：地域の伝統あるものだから、伝承していかないといけない^⑦。子どもたちに伝えていきたいと思う。現在、小学校4年生の体育で民謡が取り入れられているので伝えていくというところは大丈夫でないかと思う。私も協力できることがあればするつもりです。

著者：ところで、Bさんどこで民謡を習ったのですか

Bさん：私は、家の近くに民謡をしている人がいたのでそこで教わりました
よ^⑧。家族もできたしね。

彼らは幼いころから慣れ親しんできたために民謡に対する楽しさやおもしろさといったものがインタビューの中で感じられた。下線部⑤にも見られるように、彼らは高齢のため現役として踊ったり謡ったりすることからは引退している。民謡を踊ったり謡ったりしていくことは、かなりの体力が必要となり、高齢者が現役を続けていくことは困難なのである。そのために、彼らは民謡を後世に伝えていくことに生きがいを感じているのである。伝承していくことが責任であり、役割であるといった感じとして受け取ることができる。それは、民謡についての話になると、この年代の人全てが熱心に語ってくれたということも考慮するべきであろう（下線部③④⑦参照）。また、下線部①②を見てもわかるように、子どもの民謡への取り組みを見守っていることが窺える。Aさんの場合であると、各種民謡を披露する催しには、ほとんど参加しており、子どもたちや外部地域から嫁いできた人の民謡に対する習熟についても目を光らせている。そのために、「覚えがいい」「動きがよい」など細かなところまで指摘できるのである。このように、この年代のとくに民謡を伝承してきた人たちは、民謡に対する思いは強く、また伝承に対する意識も高いものであった。伝承することに社会的な責任と役割を感じていることが理解できた。

また、下線部⑤⑧を見てもわかるように、学校教育で民謡が取り入れられなかった年代の人達は、地域や家庭で伝承活動が行われていたことがわかる。言い換えれば、家族や親しい友人に民謡に取り組んでいる人がいなければ、民謡に触れる機会は非常に少ないということがわかる。

【事例2：Cさん－65歳・男性、Dさん－85歳・女性】

著 者：民謡についてどう思いますか

Cさん：五箇山の民謡は「麦屋節」と「こきりこ節」が有名で独特の節がある。そんな特徴のある民謡をなくしてはいけないと思う。しっかりと次世代に伝えたい⑩。また、五箇山の子どもは、学校で習っているために皆踊りが踊れると思う。民謡は無形文化財に指定されているから大切に守っていきたい。子どもたちには守ってほしいしね⑩。

著 者：唄や踊りはされるのですか

Cさん：もうこの歳ではできないですよ。僕は、学校で習ったりしなかったから踊ることはできない⑪。踊りたいとは思ったけどね⑫……。

著 者：どうしてしなかったのですか

Cさん：そんなことして、遊んでいる暇⑬がなかったし。それより、民謡に携わっている人がだれもいなかった⑭から……。

著 者：民謡についてどう思いますか

Dさん：大切なものであると思うよ。

著 者：とくに踊りについてはどうですか

Dさん：今の子どもたちは、学校で学んでいるが、私が子どもの時は学ぶ機会がなかった⑮。この地方の人は、ほとんど踊れると思うが、私は踊ることはできない⑯。私にとって、民謡はお祭りの時等に観る特別なものです⑯。

著 者：教えてもらう人はいなかったのですか

Dさん：いなかったね⑯。友達にもできる子がいたけどね……。

著 者：民謡は伝えていかなければならないと思いますか。

Dさん：そりゃ、この地域の伝統的な文化だし、天皇さんにも披露したのなんだから、子どもたちに伝えていかないといけないよ。いま、学校で教えているから大丈夫だとは思うけど。私も唄くくらいはなんとかなるからね。孫と一緒に唄いながら伝えていきたい⑯と思う。

下線部⑪⑯に見られるように、彼らは民謡にあわせて踊ることができない。

それは、現在のように学校教育中で民謡に関する授業がなかったことや家族内に民謡に従事する関係者がいなかったことがあげられる。この年代の人たちは、民謡を学校で学ぶのではなく、地域や家庭で民謡を教えていたのである。そのために、民謡に関係する人がいないと民謡に触れる機会がほとんどない（下線部⑭⑮⑯参照）。二人とも家族には民謡に従事している人はなく、経済的な問題や家庭環境の問題から、民謡を習いに行くだけの時間やゆとりがなかった。また、地域的にも民謡に対する考え方が否定的であったことも考えられる（下線部⑬参照）。民謡は、皇族に披露したことによって全国的な広がりを見せ認められていったが、地域の中ではそれとは異なっていたのである。民謡を価値あるものとして保存していこうと思う人は少なかった。このような背景もあり、学校教育内で取り上げられるまでの年代は、踊ることや謡うことのできない人も存在した。そのため、民謡も誰でもできるというのではなく、ある一部の人にしかできないものであった。民謡は、この地域に住む多くの人が娯楽のひとつとして考えられていたために、時間的な余裕がないとできない高価なものであったともいえるのではないか。そのため「したくてもできない」という状況があり、それが憧れや特別なものとしてのまなざしで見られているのである（下線部⑫⑰参照）。そのため民謡に対する憧れや願望は強くあり、それが子どもたちに伝承していくという気持ちに強く反映されていると考えられる。下線部⑱にも見られるように、踊ることはできないが唄うことによって民謡を伝えていく。自分ができることを子どもたちに伝えていこうとする姿勢が見られた。

このような点も踏まえると、彼らが若かった頃、民謡を踊ったり唄ったりすることへの願望は強いものであったといえる。しかしながら、経済的面や家庭の環境、民謡への認識などの状況により、したくてもできないという環境にあった。そのために、憧れや特別なものという感情を生み出したのである。自分達ができなかったことを子どもたちに伝えることによって、できなかったという自分の思いを達成しようとしているのである。このような感情が反映されているために、民謡を伝承させるという強い気持ちが生まれている。

【事例3：Eさん－60歳・女性、Fさん－53歳・男性】

著者：民謡についてどう思いますか

Eさん：子どもの時に、祭りや祝い事等で民謡を目にすることが多かった。人に頼まれたりして結婚式の時に踊ったりした事もある。見よう見まねで踊りは覚えたと思う。だから身近なものであったと思います。民謡は、無形文化財に指定されているので非常に光栄なことだと思います。

著者：民謡伝承については

Eさん：重要なことであると思います。いま、息子の嫁は、民謡を習いにいっており馴染もう^㊸と努力している。だから、会話の中でも民謡の話がおおく^㊹、たまに教えたりしている。家族の中でも民謡の後継者の話はよくする。孫も学校で習っており、家族内に民謡後継に携わる者が多い^㊺。

著者：Eさんが子どもの頃に、家庭の中には民謡に携わる人はいましたか。

Eさん：はい、父が。

著者：家庭内でも教わったりはしましたか。

Eさん：多少はあったと思います。昔のことだからね……。

著者：民謡についてどう思いますか

Fさん：この地域の民謡は、個性がありひとまとめにすることはできない。公演や祭りの場で演技することで地域に一体感が生まれる^㊻と考える。昔は集落によって言い回しが異なり、より地域性があつたのだが……。

著者：今はどうなんですか

Fさん：地域性は薄れているのが現状です。後継者がなかなかいないし、子どもの数が減っているから、各地域でというわけにはいかない。

著者：伝承については

Fさん：伝承は重要であると思う。維持していくのではなく、社会生活の一部として溶け込んでいくことが大切だと思う^㊼。それがうまくいけば、自然に続くだろうというのが理想かな。まあ、僕らはいままで、受け継いできたものを次世代に伝えまたその後へと伝承することは大

切だと思し、やっていかなきゃならん。親も保存会のメンバーだったし、保存会としての役割もあるからな。

小学校の在籍中または入学当初から民謡が授業の中で取り入れられた年代の人たちである。この年代以降は、生きがいとして民謡の伝承意識が強いグループと意識が弱いグループに分かれる。インタビューからもわかるように、意識の強いグループは、親が保存会のメンバーや家族、親類など家庭内に民謡に対する保存、伝承意識が強い人の存在があったのである（下線部②⑤参照）。また、下線部③からわかるが、学校教育で民謡を取り扱うことで、民謡が誰でも踊れることによって地域の一体感が生まれるのである。特別なものとして考えられてきた民謡が、誰でも行えることによって、身近な存在になり地域に共通した連帯意識が形成されるのである。これにより、地域の活性化や一体感を生んでいこうとするのである。

また、下線部②④から、民謡がコミュニケーションの一部として、家庭や地域に存在していることが窺える。この地域に嫁いできた人にとっては、民謡がコミュニケーションのツールとしての役割が存在することも明らかになった。伝承に対する意識は、事例1、2と同様に強いものであった。学校教育が民謡の認識や理解を強め、伝承意識を生み出していたのではなく、家庭や地域環境に強く影響されているものであることがわかった。

【事例4：Gさん－58歳・女性、Hさん－60歳・男性】

著者：民謡についてどう思いますか

Gさん：学校で習ったので身近には感じる⑥。

著者：それについてはどう感じますか

Gさん：悲しい感じを受けて独特なものだと思った。民謡については、文化財にも指定されているから重要なものだと思うけどね……。

大切なものであることは確かだけど、そればかりではいけないと
……⑦。

著者：伝承については

Gさん：学校教育の中で行われているから……。保存会の人たちが伝えてくれるから⑧、特に心配してない。私たちが特別何かやらなくてもいい

いと思う㉔。

著 者：Gさんは、家庭内に民謡に携わる人はいましたか

Gさん：いませんでした㉕。

著 者：学校で民謡をやっていたと

Gさん：民謡を踊ることは嫌いでないし……身近なものにはなりましたがね。強く思うかどうかは個人的な問題だと思います。

著 者：民謡の伝承についてどう思いますか

Hさん：子どもの頃から知っている。民謡に対して残したいという気持ちはあまりない㉖。だって、好き嫌いもあるしね。個人的に残したいと思っている人は少ないと思う。保存会や一部の熱心な人々は強く思っているみたいだけど……。伝承はそういう人たちに任せておけば大丈夫でしょ㉗。ただ、少子化とかで大変だと思うけど……昔は宴会の席でも良く目にしたが最近はあまり見ないな。

著 者：学校で民謡の授業をしていたと思うのですが

Hさん：確かにやっていただけ、興味はなかったし……とくに印象が残っていることもないね。熱心にやっている人もいたけど……。

著 者：家庭内に民謡に携わる人はいましたか

Hさん：趣味的にやっているというか、近所つきあいのためにやってるようなものでしたよ、親は。それほど、熱心でもなかった㉘しね……。

このグループの人は、民謡に対する伝承や保存についての認識が弱いのである。彼らは、民謡に対しては否定的な意識ではないが、民謡に対する価値意識が薄れているようである。少子化や過疎化のために、民謡を学校教育の中で行うことによって、伝承の機会が増えるという点は理解できる。民謡に従事する家庭の子どもたちだけでなく、すべての子どもたちにも民謡に触れさせることによって、地域の伝統文化に対する価値意識の形成や地域の一体感を図ろうとしたことには結果がでている（下線部㉘）。しかしながら、学校教育に取り入れたことにより民謡への尊敬や憧れ、価値意識が変化しているのではないかと考えられる。

学校教育内で民謡の授業が行われなかった時には、「特別のもの」として

の意識から、大衆化されることによって、「誰でもできるもの」という価値観の転換が起こったといえる。下線部⑳㉑㉒を見ても、他人事、他人任せという意識が存在する。学校教育で民謡が取り入れられたことによって、誰でも民謡に触れることができるという身近な存在になったという点は評価できる。しかし、それによって民謡に対する価値意識が、「特別なもの」から「身近なもの」という変化によって、伝統文化である民謡に対する意識の二層化が起こったといえる。

高齢者が民謡の伝承を生きがいとしてきた62歳以上の年代から、それ以下の年代では同じように民謡の伝承を生きがいとして形成し、もう一方では、その意識が薄れていくという現象が起こっている。このような傾向は、年代が若くなればなるほど、量的にも後者の考え方が多くなっている状況にある。すなわち、一部の住民を除いて、民謡の価値意識が低下しているのではないかと考えられる。また、このグループにおいても民謡に携わる人の存在がなかったことが大きいともいえる。

5. おわりに

民謡を「特別なもの」として認識してきた世代から「身近なもの」として認識されてきた世代では、生きがいとして民謡の伝承に対する意識は異なったものであった。民謡の伝承に生きがいを感じていた人たちは、学校教育で民謡に対する取り組みが行われなかった年代（事例1、2）と学校教育内で民謡の取り組みが行われ、また家族や親戚といった身近な人に民謡保存会などに携わる人がいた人たちであった（事例3）。このように考えると、学校教育での民謡の取り扱い、必ずしも有効な結果がでたわけではなかった。確かに学校教育で民謡を扱うことによって、新しい人、今まで携わる機会のなかった子どもたちに機会を与えたことは、民謡に対する意識や地域への意識を強いものにしたことは違いない。また、少子化による後継者の問題も幾分かは有効な評価を得られるのではないかと思う。

しかし、高齢者の民謡の伝承に対する意識は、二層化したことはマイナスの結果ではなかったか。学校教育の取り組みが、結果的に民謡の価値意識を二層化させている原因のひとつになっているのである。この地域では、多く

の高齢者が伝統文化の伝承を生きがいとして次世代に受け継がせるという、社会的な役割を担っていたが、それが一部の限られたグループだけのものとなりつつある。誰でも民謡に触れることができることで、触れる機会のなかった子どもへの民謡に対する認識の形成や地域の一体化意識の形成といったプラスの面も理解しなければならない。

このような民謡の伝承意識の形成で、62歳までの年代と62歳以降の年代とでは、その意識の形成に大きな差が見られた。その原因として考えられることに、学校教育があげられる。とくに、その導入方法が原因であったと考えられる。学校教育で取り扱われる以前は、地域や家庭で民謡の伝承活動が行われていた。民謡の伝承は民謡の価値意識も含めたものであった。しかし、学校教育で取り扱われた時には、民謡の価値意識の伝承ということではなく、民謡に対する意識の形成であった。具体的にいうと、学校教育で取り扱うまでは、民謡に対する意識は、否定的でありまた羨望的であった。民謡が身近なものではなく、一種遠い依存であったのである。民謡に対する理解や認識は薄く、伝統的な民謡を地域住民に理解させ、認識させることによって民謡の伝承、保存を容易にし、地域の一体感を民謡を行うことで育成しようと考えたのである。そのために、昭和28年の導入時期は、マスメディアとして学校教育の中で取り扱われたのである。それによって、住民の民謡に対する理解がまし、また地域の一体意識を形成することができたことは評価できる。

しかし、ゲームとして取り扱うことで、民謡に対する価値意識は生まれてこなかったのではないかと考えられる。踊りの形や唄の歌詞など外的な面（ハード面）は伝承することはできるが、どのような気持ちで踊るのかや民謡の価値意識という内的な面（ソフト面）は伝承することができなかったのではないか。そのために、民謡の伝承に対する意識が二層化する傾向が生まれたといえる。

本調査で明らかになった点は、高齢者の生きがいとしての民謡の伝承意識は、学校教育で民謡が取り扱われる前の年代では強い意識が存在するが、学校教育導入以後、意識の強いグループと弱いグループという二層化を生み出している。伝統文化の伝承について井上忠司⁽⁶⁾が、文化の伝統は「下からの伝統」、大衆による伝統の自覚化によって地域の伝統文化として伝承されると論じている。つまり、地域住民の伝えようとする強い意志と努力がなけ

れば、地域固有の文化でもたちまち衰退していくのである。このように考えると、民謡保存会のみが、伝統芸能の保存に積極的に携わったとしても、地域に住民が民謡保存意識を持たないと、この地域の民謡は衰退していくことになるのではないか。学校や地域が今後どのように民謡に対する意識を子どもたち伝えていくかが課題となるであろう。

【注】

- (1) 塚本哲人『高齢者教育の構想と展開』全日本社会教育連合会、1985
- (2) 高橋一夫「地域の特性を生かした生涯学習のあり方 ―インタビュー調査による青少年の意識に関する実証的研究―」『佛教大学大学院 紀要』第29号、佛教大学大学院、2001年
- (3) 麦屋節は富山県の代表民謡として知られている。この唄の由来は一般的には戦に敗れ、五箇山の地へ逃れてきた。踊りの特徴は平家の落人が華やかだった頃をしのび唄や踊りにしたと考えられている。紋付、袴、白たすき、刀を手挟み、笠を手にもち、古武士の哀調と、また格調の中に勇壮な舞いとなっている。昭和二十七年には文化保護法によって無形文化財に選定された。

＜歌詞＞

一、麦や菜種は二年で刈るに 麻が刈らりよか 半土用に
一、波の屋島を遠く連れ来て 薪樵るちょう 深山辺に
一、烏帽子狩衣脱ぎ打すてて 今は越路の 袖屋かな
一、心淋しや落ちゆく道は 川の鳴る瀬に 河鹿の声
一、川の鳴る瀬に絹機立てて 浪に織らせて 岩に着せよう
鮎は瀬につく島木に宿る 人は情の 中に住む
- (4) 大化改新にあたり、豊作祈願に山伏がコケラ経を読んだのが訛って小切子となった。

＜歌詞＞

- 一、子の竹は七寸五分じゃ 長い袖のなかかいじゃ
一、踊りたきゃ踊れなく子をいくせ ささらは窓のもとにある
窓のサンサモデレコデン はれのサンサモデレコデン
一、向いの山を担ずことすれば 荷縄が切れてかつがれぬ
一、向いの山に啼く鶯は 啼いては下り啼いては上り
朝草刈りの目を覚ます覚ます
一、月見て歌う放下の筑子 竹の夜声の澄みわたる

- 一、想いと恋と笹船に乘せりや 想いは沈む恋は浮く
一、向いの山に光るもんじゃ何んじゃ 星か蛍か黄金の虫か
今来る嫁の松明ならば さし上げてともしやれ優さ男

(5) 春の三月になると早朝からサイチン（ミソサザイ）がさえずり始める。半年間雪の中に閉じ込められていた五箇山の人達は春が近いと大変喜ぶ。サイチンは動作が素早く朝早くから飛び回る様子から娘をもつ母親は自分の娘もあのように甲斐甲斐しく働き、良縁があることを願い、仕事に合わせ歌い踊ったと伝えられている。

<歌詞>

- 一、桶のサイチン 機織る音に
ア トイチン トイチン トイチンサ
ヤーサレチ トチレチ トイチンサトイチンサ
拍子そろえてササ歌い出す
ア やれかけはやせよ トイチンサ
トイチンチャサレチトイチンサトイチンサ
一、わしが若い時や 五尺の袖で
道の小草も なびかせた
一、鳥がうたえば はや夜も明けて
紙屋ナ のぞきの窓もはる
一、声はかれても まだ気はかれぬ
藤の花咲く ほととぎす
一、来いといわれず 手までまねかれず
ささの 五十竹の葉でまねく

(6) 井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1984

【参考文献】

- 金子勇『地域福祉社会学』ミネルヴァ書房、1997
井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、1984
大塚達尾雄編『入門 社会福祉』ミネルヴァ書房、1982
神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980
塚本哲人『高齢者教育の構想と展開』全日本社会教育連合会、1985
西岡正子『生涯学習の創造』ナカニシヤ出版会、2000 塚本哲人
岡崎友典『家庭・学校・地域社会』放送大学教育振興会、2000
鈴木幸雄『社会福祉概論』中央法規、2001

